

福祉実践について (4) : 介護福祉士の養成教育を中心に

著者	本間 真宏, 保延 成子, 三角 同, 小林 捷哉
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	31
ページ	109-117
発行年	1991
出版者	東京家政大学
URL	http://id.nii.ac.jp/1653/00008835/

福祉実践について——(4)—— — 介護福祉士の養成教育を中心に —

本間真宏 *・保延成子 *・三角 同 *・小林捷哉 **
(平成2年9月30日受理)

A Study of Social Work Practice — (4) — — Considering to Care Worker's Training Guidance —

Masahiro HONMA, Shigeko HONOBE, Hitoshi MISUMI and Katsuya KOBAYASHI

(Received September 30, 1990)

はじめに

私たちはこの数年、大学の特別研究費および特定研究費を受け「職業としての家政学」というテーマのもとに、共同研究を続けている¹⁾。主たる関心は「福祉実践」を考えるとということであるが、そこに家政学の知見をできるだけ取り入れてみようということであった。

家政学について「どこか古くさい響きを帯びており、女子大学においても、その名で呼ばれる学部や学科を、今風の呼び名に変えようとする動きも顕著だといわれ²⁾」ながら、地球環境問題を考えるさいに「家政学」は有効だという指摘がある。私たちも、次のような点に留意しつつ家政学について考えてきた。すなわち「社会の最小単位としての家族の扶養機能を、家庭生活の科学化を重視する家政学は強化するであろうが、社会的視点を失うことになると、福祉の含み資産としての役割を今まで以上に負わされる³⁾」ことになってしまうということなのである。

ところで、これからの福祉実践における主要な課題が老人や障害者たちの介護にあることは自明のことである。その従事者養成についても一定の方向が示され、すでに有資格者(介護福祉士)を送りだしている⁴⁾。ここで保育者養成教育を基盤とした介護福祉士養成教育についてみておくことは、たんに私たちにとってだけでなく、短大保育科の今後を考えるうえで何らかの意味をもつものと考えている。

介護福祉士資格と養成教育

介護福祉士は、社会福祉士及び介護福祉士法の規定に

* 児童学科・保育科 ** 白梅学園短期大学

よれば、「専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき入浴、排せつ、食事その他の介護を行い、並びにその者及びその者の介護者に対して介護に関する指導を行うこと」という職務に従事する国家資格をとまなう専門職である。社会福祉士及び介護福祉士法は、1987(昭和62)年5月に成立した、社会福祉専門職の資格を法律レベルで規定した、新しい法律である⁵⁾。これまで社会福祉関係の専門職に関する規定は、社会福祉主事は社会福祉事業法による任用資格、児童福祉司などの福祉司は各福祉法による任用資格、保母については児童福祉法施行令という政令に規定する資格であったし、生活指導員・児童指導員などは省令による実質的な任用資格であった。

この介護福祉士の養成は主要には養成施設でなされるが、そのほかに一定の要件を満たしている介護の現業に従事している者を対象とした国家試験の制度があり、合格者は国の指定する機関に登録することによって資格取得ができることになっている。養成施設は必ずしも学校であることは必要とされていないが、現在、設置認可を受けている養成施設は短期大学または専門学校となっている。養成施設には、高等学校卒業者を入学資格とする2年の課程と他資格制度(保母養成所、社会福祉士養成施設)の養成校の卒業生・社会福祉系大学卒業生を対象とする1年の課程がある。

ここでは1年課程の介護福祉士養成を中心にみていくことになる。さて、保育者養成教育を基盤とした介護福祉士養成教育を行っているのは、1990年4月現在で、短期大学が20校、専門学校が5校である。それは介護福祉士養成校101校の5分の1を占めている。短期大学の場合

課 題 と 方 法

は保育科または幼児教育科などの本科課程を基盤とし、その上の専攻科に設置され、そのほとんどが福祉専攻となっている。この福祉専攻は、本来福祉系学科を開設していなければ福祉専攻を有する専攻科の設置は認められていなかったが、特例的に介護福祉士養成のために認められている。専門学校の場合もほぼ同様である。2年課程と1年課程を併設している学校は2校ほど存在する。なお、1年課程は社会福祉系の大学で厚生大臣の指定した科目を修めた者ならびに社会福祉士養成施設を卒業した者を入学資格とする課程もあるが、開設している学校はわずかである。

筆者の1人、小林が勤務する大学では保育科の上に1年課程の専攻科を設置しているが、従来から開設している保育専攻に加えて、福祉専攻を増設し、1年課程の介護福祉士養成施設としての指定を受け、1989年4月より養成教育を開始した。本専攻は保母養成所を卒業し保母資格を有する者を入学資格とする1年の課程である。社会福祉系大学の卒業者を対象とする課程は需要がほとんど望めないところから併設しなかった。

この1年課程の特徴は、介護福祉専門科目（必修）の総授業時間数（840時間）に実技（演習）・実習の科目の時間数がかなりの比重を占めていることである。実技（演習）・実習が300時間で35.7%、介護実習が360時間で42.9%となり、あわせて78.6%となっている。ちなみに保母養成教育課程の場合は、甲類の総授業時間数（1,080時間）に対して、実技（演習）が510時間で47.2%、保育実習が180時間で16.6%となり、あわせて63.9%となる。介護福祉士養成教育においては実技（演習）・実習が保母養成教育以上に重視され、とりわけ施設における配属実習の時間数の多いのが大きな特徴といえよう。

このような保育者養成教育を基盤とした介護福祉士養成は、養成教育の本筋である高卒2年課程との対比においてどのような特徴があるのだろうか。言葉をかえていうならば1年課程の存在意義はどこにあるのかを考えてみなくてはならない。そのために、資格取得の動機や（生活歴、家族的背景をふくんでの）入学志望動機、対象者観・対象者理解、学習（講義・演習・実技科目）への取り組み意欲や理解度、実習への取り組み意欲や目的設定あるいは達成度、社会福祉観の変化・形成などについてできるだけあきらかにしなくてはならない。そのため課題と方法について述べておこう。

介護福祉士養成教育における課題は主に次の5点である。第1に介護福祉を学ぶ学生の意識の解明、第2は教育課程の点検、第3に教授法の研究、第4として実習指導の内容と方法、実習の指導體制の研究と点検、さいごに介護概念の確立と介護業務の範囲を確立するための努力となろう。次に、そのそれぞれについてみておこう。

① 学生の意識に関しては、入学の動機（入学前に形成された動機）、介護業務のイメージ、介護業務に必要な知識・技術の認識、専門職としての介護福祉士のイメージ、学生自身の自己理解・自己覚知（性格、資質、適性、自己の課題等）、授業に関する評価、介護実習、卒業後の進路などを把握する必要がある。

② 教育課程に関しては、国の基準である介護福祉士養成科目の編成が適切かどうかの点検、とりわけ保母養成教育を終了したことを前提として組み立てられている1年課程の科目で不充分なものの検討である。

③ 教授法に関しては、視聴覚機器の利用、教材の活用方法を含めて、学習効果の上がる方法についての実践的な追求である。

④ 介護実習に関しては、実習の目標の設定と内容の編成、実習生の達成課題の設定、学生自身の実習に取り組む意欲・姿勢を高めることと自己の課題の設定、実習プログラムの作成と実習施設との連携、実習指導體制の確立、事前・事後の指導の方法と内容、評価などさまざまな問題と検討すべき課題がある。

⑤ 介護業務の概念的な理解と専門職としての介護福祉士の業務の範囲と内容の確立と専門性に関しては、現在さまざまな論議があるところであり、必ずしも関係者の間に共通の認識と理解が成立しているわけではない。わたくしたちには通常の教育実践を通して、現状の把握とともに理論的に介護概念を確立すべきことが課せられているのである。

このような諸課題の設定を行った上で、学生の意識に関するものと介護福祉士養成教育課程をめぐるいくつかの課題をあきらかにするために次のような方法を採用することにした。まず、介護福祉を学ぶ学生の意識を探るために、入学時—在学期間中（介護実習を経験した後、実習の段階ごとに設定）—卒業時点、卒業後（就職後）1年経過時点<さらに実施可能であれば3年、5年と経過した時点>というように時系列を追って調査を行うこ

とが必要であろう。調査の方法は質問紙を用いるとともに、面接による調査も併用しながら行うことにしたい⁶⁾。

介護福祉を学ぶ学生に関する予備的考察

まず第1期の学生の特徴を講義や実習指導などを通して観察した結果からいくつか述べてみることにする。社会福祉に関する概念や知識は入学当初より持っており、社会福祉に対する関心が高く、自分なりの意見を有している。専攻科で学ぶ目的意識が明確であり、専門職となる者としての自覚が早期からあると感じられた。これらのことは福祉専攻の学生が、すでに保育科時代に福祉施設における実習の経験があることや、保育職に従事した経験があることによっているといえる。このことは学習態度、実習態度に大きく影響している。実習施設の評価が高いのは職業意識、仕事に関する姿勢の形成がなされていることにある。このような意味において新卒の学生と保育職の経験の有無による学生の意識の相違を比較することが必要となろう。

このことについて先行する調査としては、市川・藤野による「介護福祉士をめざす学生に対する意識調査報告(1報)——進学達成動機と介護イメージ——」(『聖徳学園短期大学紀要』第21号所収)がある。これは2年課程の学校の1年生を対象とした調査であるが、そこでは社会福祉に関する関心、理解を持ち、堅実に自己実現をはかろうとする学生像や、介護福祉士に対する現実的、実践的イメージを持っていることが示されている。

さて保母養成教育を基盤として介護福祉を学ぶ学生の意識の大きな特徴としてあげられることは、初期の段階で保育と介護との相違点に相当のとまどいが見られることである。これは成長発達過程にある児童を対象とする保育と、可能な限りの自立と生活の質の向上を目的とした介護という、明確な対象と方法の違いからくるものであろう。また介護実践の場が生活の場であり、多くの利用者にとっては人生の終末を迎える場であることにもよっているのではなかろうか。これらのことを保育との相違点として強いインパクトをもって気付くことは、そのまま「介護とは何か」を考える契機ともなるのである。

このように意欲のある学生像がまずイメージされるわけであるが、1年課程では入学してからの早い時期から実習に出る必要があるため、介護技術が伴わないことを、施設側の実習指導者から指摘される。この点に関して、養成校としては、まず前半期においては技術に関す

る基本的な考え方を確実に押さえていくことが先決であると考えている。

表1はそれぞれの教育課程を表示してみたものである。ここで1年課程においては、医学一般、レクリエーション指導法などの科目は保母養成課程で一応学習しているものとして、指定のカリキュラムには入っていない。しかし老人に頻度の高い慢性疾患や脳血管障害のように種々の機能障害を残すものについては、ひととおりの知識が必要であると思われる。また、痴呆性老人の介護は表面に表れる症状や問題行動のみにとらわれるのではなく、疾患の成り立ちや症状の関係を理解してこそ真の介護が実践されるのである。実習が進み、老人との関わりが深まるにつれて、学生の側からこれらについてのとまどいや質問が出されている。これへの対応を考えることが必要である。レクリエーション指導に関しては、初期の段階では利用者の活動に参加し、コミュニケーションを成立させる場面ではスムーズに入っているようであるが、次第に単なる参加からレクリエーションの企画を担当することが実習の達成課題となってくると、学生からはそれらに関する知識・技術を修得することの必要性がいわれている。このように短期間の養成では、理論的な学習と技術修得学習、延べ45日にわたる配属実習との理想的な時間の配分、過不足なく教授することなど、きわめて多くの問題があるといえよう。

表1 介護福祉士養成教育課程

教科目名	2年課程		1年課程							
	必修 (単位)	時 間	授業 形態	保母養成所卒業生		福祉系大学卒業生				
				必修(時数)時間	授業 形態	必修(時数)時間	授業 形態			
一般教育科目 (人文・社会・自然科学系、外国語、 保健から4科目)	○(2)	30(4) =20	講義	-	-	-	-			
専 門 科 目	社会福祉概論	○(4)	60	講義	-	-	-			
	老人福祉概論	○(2)	30	講義	○(2)	30	講義			
	障害者福祉概論	○(2)	30	講義	-	-	-			
	リハビリテーション	○(2)	30	講義	○(2)	30	講義			
	社会福祉援助技術論	○(2)	30	講義	-	-	-			
	社会福祉援助技術論	○(1)	30	演習	-	-	-			
	レクリエーション指導法	○(2)	60	演習	-	-	○(2)	60	演習	
	老人・障害者の心理	○(4)	60	講義	○(2)	30	講義	-		
	家政学概論	○(2)	30	講義	○(2)	30	講義	○(2)	30	講義
	栄養学・調理学	○(2)	30	講義	-	-	○(2)	30	講義	
	家政学実習	○(2)	90	実習	○(2)	90	実習	○(2)	90	実習
	医学一般	○(4)	60	講義	-	-	-	-		
	精神衛生学	○(2)	30	講義	-	-	○(2)	30	講義	
	介護実習	○(4)	60	講義	○(4)	60	講義	-		
介護実習	○(4)	120	演習	○(3)	90	演習	○(3)	90	演習	
介護形態別介護技術	○(4)	120	演習	○(3)	90	演習	○(3)	90	演習	
実 習	介護実習	○(10)	450	実習	○(8)	360	実習	○(8)	360	実習
	実習指導	○(2)	60	演習	○(1)	30	演習	○(1)	30	演習
合計	→	(63) 1500		10 (29)	840		10 (27)	840		

注：「社会福祉士介護福祉士学校職業訓練校養成施設
指定規則(昭和62年厚生省令第50号)第7条・別表
第3～5から小林が作成
資料：ケアワーク教育研究会編「介護福祉士養成教育の
現状と課題」1989年10月

介護福祉士課程にいる学生の意識

介護福祉課程にいる学生の意識について、とくに1年課程の学生のそれを分析し、2年制との比較や保育を学ぶ学生との比較という視点でとらえていくことにしたい⁷⁾。

まず入学の動機についてであるが、介護福祉士の養成校へはどのような動機をもって入学してきているのだろうか。表2は入学の動機を5つまでの複数回答でとり、質問項目を類型化してみたものである。

表2 入学の動機

	2年制	1年制
お年寄りの世話をしたいから	38.7	30.3
障害者の世話をしたいから	13.4	18.2
卒業後、社会福祉の施設で働きたいから	28.8	24.2
資格をとって転職したいから	7.5	12.1
個性や能力を生かす仕事をしたいから	22.0	30.3
新しい分野の仕事だから	17.3	9.1
卒業後、公務員として働きたいから	1.6	0.0
将来、自分の親や祖父母の介護にも役立つから	37.7	48.5
何か社会に役に立つ仕事をしたいから	33.2	30.3
やりがいのある、おもしろそうな仕事だから	32.2	30.3
社会的に意義のある重要な仕事だから	23.9	9.1
他人に喜ばれる仕事をしたいから	19.0	27.3
介護の専門的な知識・技術を勉強したかったから	27.5	57.6
女性向けの専門資格だと思ったから	2.9	3.0
保母の資格だけでは不十分だから	1.4	18.2
資格だけでもとっておきたいから	15.8	21.2
両親がすすめてくれたから	7.2	12.1
高校の先生がすすめてくれたから	5.0	3.0
看護婦を志望したが入学できなかったから	9.5	0.0
経済的に安定した生活を送りたいから	3.9	6.1
社会福祉施設での実習を経験したかったから	1.6	0.0
ただ、何となく入学した	3.7	0.0
その他	7.6	15.2

注：① 女子のみ、5つまでのMA/数値は各項目を選択した割合<％>。

② 本表は、1990年1月～2月に日本社会事業学校連盟介護福祉士養成課程特別委員会（ケアワーク教育研究会）が実施した『介護福祉士養成校／第一期、在学生の〈学習過程〉に関する調査』の結果に、さらに白梅学園短期大学専攻科福祉専攻（1年制）の第1期卒業生を対象として連盟の調査と同じ調査を小林が行った結果を、1年制のデータに加えて小林が作成したものである。

さて、1年制の学生があげている動機を比率の高い順に並べてみると、「介護の専門的な知識・技術を勉強したかったから」が57.6％、「将来、自分の親や祖父母の介護にも役立つから」が48.5％とかなり高い比率を示している。そして30％台で「お年寄りの世話をしたいから」とか「個性や能力を生かす仕事をしたいから」そして「何か社会に役に立つ仕事をしたいから」と「やりがいのある、おもしろそうな仕事だから」がつづいている。20％台では「他人に喜ばれる仕事をしたいから」と「卒業後、社会福祉施設で働きたいから」や「資格だけでもとっておきたいから」となっている。10％台で「障害者の世話をしたいから」とか「保母の資格だけでは不十分だから」そして「資格をとって転職したいから」や「両親がすすめてくれたから」となっている。

これを2年制の学生と比較してみよう。次のような特徴がみられる。2年制との比較で1年制に高い比率で現れている動機は、「介護の専門的な知識・技術を勉強したかったから」（1年制57.6％-2年制27.5％）、「将来、自分の親や祖父母の介護にも役立つから」（48.5％-37.7％）、「個性や能力を生かす仕事をしたいから」（30.3％-22.0％）、「他人に喜ばれる仕事をしたいから」（27.3％-22.0％）、「保母の資格だけでは不十分だから」（18.2％-1.4％）、「障害者の世話をしたいから」（18.2％-13.4％）、「資格をとって転職したいから」（12.1％-7.5％）、「両親がすすめてくれたから」（12.1％-7.2％）などである。逆に、2年制に高く現れている動機は、「お年寄りの世話をしたいから」（2年制38.7％-1年制30.3％）、「卒業後、社会福祉施設で働きたかったから」（28.8％-24.2％）、「社会的に意義のある仕事だから」（23.9％-9.1％）、「新しい分野の仕事だから」（17.3％-9.1％）などである。

これらの結果からいえることは、1年制の学生の入学動機は、介護の勉強、将来に備える、資格がらみなどに重点がおかれているということであろう。

つぎに介護福祉職のとらえ方であるが介護福祉を学んだ学生たちはその職業をどのようにとらえているのだろうか。それは自らの介護福祉職へのアイデンティティの確立に関わってくる問題といえる。これらは学内の授業や施設現場における実習の機会などでふれる介護業務に携わる寮母の姿などをとおして形成され、変化していくものであるといえよう。さきの入学動機と同じ調査の結果からみていくことにしたい。

表3 保育職／介護福祉職のとらえ方

枠組	項目	保育者	介護福祉士	
			2年制	1年制
属性	<共通> 労働に耐える体力	77.6	51.2	54.5
	<共通> 女性であること	0.0	0.9	0.0
	<共通> できるだけ若いこと	0.0	0.9	0.0
業 知識・ 技術	<保育> 教育学や心理学などの専門的知識の習得	20.4		
	<介護> 福祉に関する専門的知識の習得		24.7	33.3
	<保育> 音楽や造形などの専門的技術の習得	22.4		
	<介護> 介護等に関する専門的技術の習得		60.7	75.8
	<共通> 社会的一般常識の習得	20.4	16.1	12.1
績 免許・ 資格	<共通> 免許や資格は必要	19.7	5.6	9.1
	<共通> 免許や資格は必ずしも必要でない	5.3	17.6	6.1
	<共通> 免許や資格は全く必要でない	0.0	0.7	3.0
パーソ ナリ ティ	<保育> 安定した情緒や豊かな情操	96.7	—	—
	<保育> 豊かな個性	15.8		
	<介護> 個性的であること		4.2	3.0
	<保育> 豊かな協調性	44.1		
	<介護> 協調性に富んでいること		25.9	18.2
	<介護> やさしさ	—	42.7	33.3
子 接 対 象 も と の 理 解	<介護> 忍耐や根気	—	50.9	27.3
	<保育> 子どもをこよなく愛する心	79.6	—	—
	<保育> 子どもを深く正しく理解しようとする態度	94.7		
	<介護> 老人や障害者を理解しようとする態度		64.5	81.8
仕 組 む 姿 勢 に 取 り	<保育> 子どもがただ好きという気持ち	3.3	—	—
	<介護> 介護の仕事が好きという気持ち	—	45.8	27.3
	<介護> プロフェッションとしての意識	—	7.3	27.3
	<介護> 自己理解	—	8.2	9.1
	<介護> 犠牲的精神	—	4.2	0.0

注：① 5つまでのMA／数値は各項目を選択した比率(%)である。

② <保育>は保育を学ぶ学生、<福祉>は介護福祉を学ぶ学生、を対象としたそれぞれの調査における質問項目である。<共通>は両者とも同じ質問項目である。

資料：本表は、民秋言・小林捷哉「『保育』の認識過程に関する研究」(その社会学的的方法試論)／(第二報)／(第三報)『白梅学園短期大学紀要』第16号～第18号、1980～1982年、において用いられている分析枠組と保育を学ぶ学生(白梅学園短期大学保育科)の意識調査の結果と、その調査のごく一部を取り入れて1990年1～2月に日本社会事業学校連盟介護福祉士養成教育課程特別委員会とケアワーク教育研究会が実施した『介護福祉士養成校第一期在学生の<学習過程>に関する調査』の調査結果とを比較できるように小林が作成した。

表3の介護福祉士の欄の数字から、介護福祉職の条件（5つまでの複数回答）をどのようにとらえているかをみることにしたい。1年制の学生の場合は「老人や障害者を理解しようとする態度」が81.8%、「介護等の専門的技術の習得」が75.8%と高い比率になっており、ついで「労働に耐える体力」が54.5%、「福祉に関する専門的知識の習得」と「やさしさ」が33.3%となっている。2年制の場合は1年制ほど特定の項目に集中していないが、順位は4位以下はかなり異なっている。もっとも高い比率となっているのは1年制と同様に「老人や障害者を理解しようとする態度」で64.5%、以下、「介護等の専門的技術の習得」「労働に耐える体力」「介護の仕事が好きという気持」「忍耐や根気」「福祉に関する専門的知識の習得」「協調性に富んでいること」などがあげられている。こうしてみると介護福祉職のとらえ方として対象者理解の視点、専門的技術の修得、体力、やさしさ、忍耐や根気の5つが大きな要素となっていることがわかる。1年制の場合は対象者理解の視点、専門的技術の修得の面が特に強く意識されているのが特徴であるといえよう。

ところで表3の枠組は保育を学ぶ学生の調査のために設計したものであった。そこでは職業としての保育をとらえる枠組として「属性」「業績（知識・技術と免許・資格に分ける）」「パーソナリティ」「子どもとの接触視点」の4つの領域からなっていた。これを介護福祉職にあてはめるとすると、「子どもとの接触視点」は「対象者との接触視点」に置き換えることができるし、さらに「仕事に取り組む姿勢」を付け加えることができる。今回の調査ではこの枠組に基づいて調査したわけでは、かならずしもないが、質問項目の大半は共通している。そこで、この枠組でみてみると、対象者との接触視点と業績がかなり重視され、ついで属性となり、パーソナリティや仕事に取り組む姿勢はそれほど重視されていないとみることができる。対象者との接触視点では対象者理解が重視されている。業績では専門的技術の習得が重視され、専門的知識の習得はあまり重視されていない。また免許・資格も重視されていない。属性では体力が注目されている。さらに女性であること、若いことなどは介護福祉職の条件としてはあまり意識されていないのが特徴的である。どうも介護福祉職は中高年の人や男性の仕事でもあるというように認識されているように思える。

次に保育職との比較でみてみよう。保育職の場合は子

どもとの接触視点、パーソナリティのうち情緒・情操が、そして属性のうちの体力が重視されている。それらの項目は介護福祉職に比べてかなり高い比率で現れていることに注目したい。その他の項目では、保育職の方で比率が高いのはパーソナリティのうちの協調性と個性、業績のうちの社会的常識の習得と免許・資格の必要性の項目であり、介護福祉職の方に高い比率である項目は専門的技術の習得ということである。この専門的技術の習得の比率の差はかなり大きく、介護福祉職における技術の習得という業績面がとりわけ重視されていることに注目しなくてはならない。保育を学ぶ学生の場合は、保育職を業績面ではなく、自己に備わっている属性や性格あるいは子どもに対する姿勢をよりどころとする傾向があるのに対して、介護福祉を学ぶ学生は、介護福祉職を業績と対象者理解の側面ととらえているのが大きな特徴となっているのである。

これまで、入学の動機と介護福祉職の条件のとらえ方という2側面から介護福祉を学ぶ学生の意識について考えてきた。これからの課題としては老人・障害者との生活経験・親の仕事、生活程度、資格取得意思決定への影響者、入学時の志望状況、学校生活の満足度、就職希望先と決定先、介護という仕事の意味付け、各科目の習得度、介護実習への姿勢・内容・目的の達成度・事前学習社会福祉観の変化、介護福祉士になることへの意欲の変化、介護福祉士への自己適正評価などについて、さらに考えていくことであろう。そして1年制と2年制との比較検討、他の専門職、たとえば保育、福祉、看護、教育などを学ぶ学生との比較検討を、資料を得ながらみていかななくてはなるまい。

教育課程の検討

これまでにみてきたように、介護福祉士養成の教育課程はさきに表1として示したとおりである。その教育課程は2年課程と1年課程とに分けられ、さらに1年課程は保母養成所卒業者と社会福祉系大学卒業者・社会福祉士養成施設卒業者のための課程とに分けられる。各科目は時間数で表示されているが、大学・短大のために（）内に単位数で示されている。ここで演習という授業形態には実技学習をかなり含んでいることである。また実習関係では、保育実習のばあいとはかなり異なり、施設現場への配属を行う「介護実習」と実習の事前・事後の指導を行う「実習指導」とが厳密に分けられている。

さきに述べたように、この教育課程の大きな特徴は保母養成に比べて演習・実習の占める割合が著しく高くなっていることであり、また2年課程の場合は短期大学における養成ができるように63単位を必修単位としてあるのである。必須の科目が専門的な知識・技術の習得を目指した科目として指定されており、それぞれの養成校が独自の科目を開講するとなるとカリキュラムがかなり過密となり、学生の負担が大きくなるが、養成校の独自性を打ち出すとなると過密化を避けることはできないことになる。2年課程の学校の多くは、保育や社会福祉の従事者養成を行ってきたうえで介護福祉士養成教育を開始しているので、これまでの実績を踏まえてさまざまなカリキュラム編成の工夫をしているように思える。

1年課程の教育課程は、表1の右欄に表示されているように、2年課程に比べてかなりの科目が設定が省略されている。保母養成所卒業者を対象とする課程の場合でみると「一般教育科目」は全くなく、「社会福祉概論」「障害者福祉論」「社会福祉援助技術(講義)」「社会福祉援助技術(演習)」「レクリエーション指導法」「栄養・調理」「医学一般」「精神衛生」などの科目は開講しなくてよいことになっている。ところが実際には、さきに述べたように養成教育を展開していく中でこれらの科目の必要性は痛切に感じられたのであった。これらの省略されている科目は、保母養成課程で履修したということになっているのであろうが、乳幼児や年長の児童を対象とした保育の営みそのもの、またはそれに重点を置いて教授する内容では老人や障害者の生活の実態と生活上の問題の把握や理解、生理、福祉対策などの基礎的理解はたいへん困難なのではないだろうか。あわせて、カリキュラム全体としては介護技術の習得に重点がおかれている技術教育の色彩が強くなるざるを得なくなっていることが指摘できるように思われるのである。

実習教育については、2年制と同じであるが、実習施設の種類の厚生省の基準によって限定され、実習施設の選定は一定の基準のもとに、特に実習指導者を選任したうえで実習施設としての適切かどうかの都道府県知事の意見書を付して厚生大臣の承認を得ることとなっている。また、看護系の教員による週2回の巡回訪問指導が義務付けられているのが大きな特徴となっている。この点、現行の保育実習指導とは大きく異なっているといえよう。多くの学校は教育歴のない、あるいは少ない看護系の教員を採用し、介護関係の専門科目の授業や実習指導を担

当させているが、そこにはさまざまな問題が生じている。組織的に大量の学生が老人ホームや重度障害者施設に、寮母の行っている業務の実習に入るのは介護福祉士養成が始まってからである。養成教育を担当する学校側の体制や施設側の受け入れ態勢はまだ不十分であるといわなくてはならない。今後の両者の協働が望まれるところであり、個々の教育実践の積み重ねが、これからの介護福祉士養成教育の発展を促していくことになるろう。

以上のような問題点を含んでいるが、制度の改正を論ずるにはいまま少しの教育実践の積み重ねのうえで評価と反省をくわえていくことが必要である。その過程において個々の養成校の努力が期待されるところであるといえよう⁸⁾。

おわりに

保育者養成を基盤とした介護福祉士の養成教育は、養成制度そのものが出発したばかりであり、介護福祉士として巣立って介護の現場に入っていったのも本格的には1990年4月からである(1年課程は1989年にごくわずかの卒業生を第1期として出している)。本稿は共同執筆者のひとり、1年半余りにわたって養成教育について感じ、考えさせられたことをもとに、共同体験にしようとしたものである。注6および7に参考文献としてあげたものは、その時々の課題意識にそって調査・研究を行ってきたものである。こうしてみると、今後、継続して追求していく必要のあることがらは、学生の意識をさまざまな視点から分析すること、授業内容の検討と適切な教授法の追求、介護実習の受け入れ施設との協働のあり方について検討していくことである。保育者養成を基盤とした介護福祉士の養成教育は何よりも、介護福祉を学ぶ学生にとって児童の福祉から成人の福祉へと視野を広げていく機会であり、効果的な教育の追求はつねになされていなくてはならない。

さいごに、次のような言葉で本稿をしめくくっておこう。「過去は、厄介だが結局はどうしようもない未来から、ほんの一時逃げ込むことのできる避難所を提供してくれる。その過去を、歴史的変動という冷酷な過程が枯渇させてしまうまで、たとえわずかのあいだにせよ、ノスタルジアが再び魔法をかけるのである」⁹⁾。そして、私たちがけってたんなるノスタルジアでもって、このような作業をしているとは思っていないと。

註

- 1) 三角 同, 保延成子, 本間真宏: 福祉実践について
- (3) - 東京家政大学研究紀要 第30集 1990
- 2) 村上陽一郎: 地球家政学とは, 月刊誌「厚生」第45
巻7号, 所収 1990
- 3) 本間真宏: 現代家族と母子福祉問題, 北川隆吉教授
還歴記念社会学論集刊行委員会, 社会変動と人間,
時潮社(東京), 1989 p. 288
- 4) これまでの状況については次のものを参照のこと。
富永雅和: 介護福祉士養成の現状と課題, 小川隆:
1年制介護福祉士養成課程の現状と課題, これらは
共に季刊「ソーシャルワーク研究」Vol. 15 No 4
1990 所収。
- 5) 厚生省社会局庶務課監修, (財)社会福祉振興・試験
センター編: 社会福祉士・介護福祉士関係法令通知
集, 第一法規 1987.
- 6) 7) 参考文献としては次のようなものがある。
山本悦子「介護福祉士の養成における課題-介護実
習を通して」日本社会福祉学会第36回大会, 1988年
10月。
小林捷哉・末田結美「保育者養成を基盤とした介護
福祉士養成教育の現状と課題-実習教育をとおして
考える」全国保母養成協議会第28回研究大会, 1989
年11月
小林捷哉・島崎敬子「介護福祉士養成教育における
実習教育の問題点と課題-養成施設の立場から-」
日本社会福祉学会第37回大会, 1989年11月
山本悦子「介護福祉士養成教育における実習教育の
問題点と課題-実習受け入れ施設の立場から」日本
社会福祉学会第37回大会, 1989年11月
前納弘武・泉 順・瓜巢一美・川延宗之・舟水浩行
・佐々木浩子「社会福祉専門職教育の理念と現実-
介護福祉士養成教育の現状をめぐって-」日本社会
福祉学会第37回大会, 1989年11月
福田幸夫「介護福祉士養成の課題-養成施設の立場
から-」日本社会福祉学会第37回大会, 1989年11月
山田幸子・米田綾子・松本栄二「介護実習指導につ
いての一年目の反省的考察」日本社会福祉学会第37
回大会, 1989年11月
- 8) 表4は, 筆者の一人, 小林の白梅学園短期大学専攻
科福祉専攻における教育課程表である。1年課程の

表4 1年課程の養成カリキュラム例

区分	学 科 目 名	授業 形態	単位	時間	必修 選択
基礎 科目	人 間 論	講義	2	30	選択
介 護 福 祉 専 門 科 目	老 人 福 祉 論	講義	2	30	必修
	リハビリテーション論	講義	2	30	必修
	老人・障害者の心理	講義	2	30	必修
	家 政 学 概 論	講義	2	30	必修
	家 政 学 実 習	実習	2	90	必修
	介 護 概 論	講義	4	60	必修
	介 護 技 術	演習	3	90	必修
	障害形態別介護技術	演習	3	90	必修
	介 護 福 祉 特 講	講義	2	30	選択
	実 習 指 導	演習	1	30	必修
介 護 実 習	実習	8	360	必修	
卒業 研究	卒 業 研 究 演 習	演習	1	30	必修
社 会 福 祉 関 係 科 目	社会福祉制度政策論	講義	4	60	選択
	障 害 者 福 祉 論	講義	2	30	選択
	家 族 福 祉 論	講義	2	30	選択
	社会福祉調査法	演習	1	30	選択
	社会福祉援助方法各論	演習	1	30	選択
	社会福祉特別演習	演習	1	30	選択
	社会福祉実習	実習	2	90	選択

- 注 ① 白梅学園短期大学専攻科福祉専攻の場合。
 ② 修了単位は30単位である。
 ③ 介護福祉専門科目が1年課程の厚生省指定基準
の科目である。
 ④ 介護福祉特講の内容は老年医学とレクリエーシ
ョン・ワークである。
 ⑤ 人間論と介護福祉特講は履修指導上, 必修扱い
となっている。

養成施設は29単位の介護福祉の専門科目の開講で良
いのであるが, 専攻科の開設認可の都合から30単位
を修了単位数としてある。開設2年目の本年度は,
開講が免除されている科目のうち医学関係科目の
「老年医学」と「レクリエーション・ワーク」を特
別講義の形で開講している。「障害者医学」の開講
も考えてはいるが時間割りが満杯のため未開講であ
る。養成校独自の科目としては, 保育専攻との共通
開講で社会福祉主事任用資格取得希望者に社会福祉

関係科目を設定してある。福祉専攻の学生の大半がこの科目群を履修するので保母養成教育で学習することになっているとして省略されている社会福祉関係科目をカバーできるようにしてある。大学の建学の理念との関連で「人間論」と、単なる養成施設にとどまらず、大学らしさを打ち出し、現場で指導的立場に立てるような介護福祉士を養成するための方途のひとつとして卒業研究を課している。次の表5では介護実習の概要を示してあるが、実習の段階は厚生省の基準どおり3期に分けて設定してある。現実としては障害者施設への配属が厳しい状況にあるので9割以上の日数は特別養護老人ホームへの配属となっている。なお在宅のケースについての介護実習は今後の検討すべき課題となっていることをいっておこう。

- 9) F・Davis (間場他訳): ノスタルジアの社会学, 世界思想社, 1990, p. 166.

謝 辞

この研究の多くは白梅学園短大教授で本学の非常勤講師をお願いしている小林捷哉氏に負っていることを記し感謝します。また大学院開設にともなう特定研究費(1989年度)を得ることができたことも記しておかなくてはならない。

表5 介護実習の例

実習段階	日 数	配 属 期 間
第Ⅰ期	11日	5月下旬～6月上旬
第Ⅱ期	10日	9月中旬
第Ⅲ期	24日	11月中旬～12月中旬

- * 実習指導は毎週2講時を設定し事前・事後の指導を行う。
- * 特別養護老人ホームと障害者施設を適宜組み合わせる。(特別養護老人ホームが全日数の86%を占める。)